

二〇二五年度 入学試験問題

経済学部A方式I日程・社会学部A方式I日程・現代福祉学部A方式

二限 国 語 (60分)

〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。
- 四 問題冊子のページを切り離さないこと。

マークシート解答方法についての注意

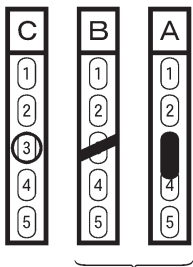
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



○でかこまないこと。

二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

二〇一一年の初夏から初冬にかけて、ヴェネチアの「塩の館」でアンゼルム・キーファーの①《地の塩》(二〇一一)という作品が展示された。かつて塩の倉庫として使われていた石造りの空間いっぱいに、横四メートル、縦二メートルほどの大きさの鉛の板がざっと二〇枚、洗濯されたシートのように吊り下げられている。その鉛の板と板のあいだには人が入れるくらいの隙間があり、この作品を見るわたしたちは板のあいだに挟まるようにして、それぞれを眺める。そのために、わたしたちはかなり近くから鉛の板を見つめることになる。見るといよりは、触れると言った方が適切かもしれない。

その鉛の板は、緑青や錆色に覆われ、それぞれが異なる色合いになっている。これらの鉛板には、もともと風景を写し出した写真が貼りつけられていたという。だが、そこには、いかなる「風景」も見当たらない。そればかりではなく、そこに写真が貼りつけられていたということさえ分からなくなっている。鉛や塩からできているこの作品は、化学変化のプロセスにさらされている。写真は、いつのまにか、埋もれ、消えてしまったのだ。

一枚一枚の板は、それぞれに、刻一刻と変化していく。空気にさらされ、物質的な変化にさらされ、そのさらされることによって形成されたその何ものかは、展示されることによって今度は「作品」としてわたしたちの視線にさらされている。これが、アンゼルム・キーファーの《地の塩》という「芸術作品」である。

いつから作品はこういうものになったのだろう。こうした作品を何と呼べいいのだろうか。この作品は、それをかたち作る物質そのものが あ に変化していくことを隠さない。そうであるとするなら、それはかつての作品のように永遠を想定したものであるとは言えない。 A 、これは何かの表象でもなければ、造形でもなく、コンポジションというもので

もない。あえて言えば、物体のアレンジ、あるいは演出と言ってもいいかもしれないが、むしろ、これは「露呈＝展示」そのものと言うべきではないか。それは何かを表象しているのではなく、露呈し、展示している。「展示」そのものによって、作品が作品として成り立っているのだ。

「展示」エクスポジション」には、さまざまな意味とはたらきがある。「外に置くこと」「さらすこと」「露呈すること」「見せるべく展示すること」「作品を展示すること」。ここで言う「エクスポジション」には、そうしたすべての意味とはたらきを畳み込む。キーファアの『地の塩』にかぎらず、芸術作品はいま、このような「エクスポジション」として自らを現しはじめていないのか。

作品が展示されるということ、わたしたちはそれをきわめて当然のこととして受け入れがちだ。だが、作品を展覧会で鑑賞するというのは近代になって始まった習慣である。一七九三年に、フランス国王の宮殿だったルーブル宮の一角がギャラリーとして一般に公開された。これがルーブル美術館の前身である。それまで、絵画や彫刻がどのように扱われていたかというと、それらは寺院や教会や権勢のある人々の館といった特定の空間に設置されて特定の役割を果たしていたり、コレクターによって個人的に所蔵されたりしていた。一般の人々に向けて作品が展示されることは、ある時代に生み出されたひとつの制度なのだ。

② この比較的新しい制度が当然のものとなってからは、作品のあり方も変わる。美術館の誕生以前にももちろん作品はつねに「見られること」を前提にして作られてきたのではあるが、美術館という制度ができてからは、特に、あらゆる人に対して展示されることが前提とされるようになったと言えるだろう。わたしたちは作品が展示されることを当然と受け止めてしまうため、「エクスポジション」を作品が展示される単なる場所だと考えてしまう。

B、いま、「エクスポジション」そのものが芸術作品のあり方に根本的な意味を持つようになっていないだろうか。

これまで芸術作品は基本的に「表象」としてとらえられてきた。それは、かつて、儀式や宗教や国家のなかで、何らかの出来事や誰かを記憶にとどめるため、のちの時代に語り継ぐため、出来事を説明し意味を与えるため、死者を弔うためなどに用いられてきた。そうした作品とは、何かを表象するためのものである。

表象とは英語で「representation」、フランス語で「représentation」という言葉であり、ラテン語の「repraesentatio」を語源としている。ドイツ語では「Vorstellung」というが、これもまたラテン語の「repraesentatio」の訳語である。

「representatio」の動詞「re-presentare」は、「目の前に置く」「再現前化する」という意味を持つ。このラテン語「representatio」それ自体は、もともとはギリシア語「phantasia」の訳語として用いられたものだった。「phantasia」は、「思い描くはたらき」のことだが、近代の語で言えば「image」とほぼ同義の語である。したがって、芸術に与えられていたのは、表象するという役割、イメージを作り出すという役割だったと言える。

C、二〇世紀の半ば頃から、表象そのものの意味が問い直されるようになった。あるいは、表象という作用が崩壊したと言っているかもしれない。「現代アート」と呼ばれるものは、何らかの表現あるいは呈示ではあっても、もはや何かを表象しているとは言えない。何かを表象することが芸術の役割ではなくなったのではないか。そう思わせる作品が現れてきている。このことは芸術における重要な転換点に見える。

芸術作品が、表象するということから離れていったとき、それは何かを露呈するものへと変わっていく。芸術作品を成り立たせる契機が、表象ではなくエクスポジションそのものになった。つまり、何かを表象するものではなくなった芸術作品は、単に「展示＝エクスポジション」されるだけではなく、何ものかを「エクスポジション＝露呈、呈示」するものへと変わっていったと言えないだろうか。

そう考えさせるのは、現代哲学のひとつの傾向、とりわけマルティン・ハイデガー以降の世界大戦の経験を経て更新されてきた共同体^③をめぐる思考の展開である。

なぜ芸術が共同体をめぐる問いと関係するのか。それは芸術作品の根本的なあり方に関係している。芸術作品はつねに「見られるもの」として作られ、「見る」ことを通して多くの人々の共有のうちに置かれる。作品は見られることを前提として作られる。つまり、作り手以外の誰かを前提として作られるのである。その前提のもとでは、作品はそれにかかわる人々の共同性においてしか成立しない。だから、芸術作品は共同性と根源的なつながりを持っており、根本的に共同的な何かであり、わたしたちの共同関係の**い**なのだ。この事実あまりに自明すぎて、かえって問題にされることがまれである。

こうした芸術のイメージのはたらきは、言葉のはたらきと同じようなものと考えてよいかもしれない。言葉は、同じ言葉を

話す人々を結びつける。それと同じように、イメージはそれを見る人々に見るという経験を共有させ、人々を結びつける。表象されたイメージは共同体を支えるものとして機能したり、共同体がイメージを手がかりとしてひとつの実体として想定されてきたりしたのである。イメージは、つねに共同体の営みにかかわってくる「政治的なもの」だったのだ。D、イメージが表象からエクスポジションへと転換したことも、人間の共同存在としてのあり方に関係しているのではないか。

共同体についての考えに目を向けてみると、これが二〇世紀の前半から大きな課題となってきたものであることが分かる。ハイデガーは、存在論の更新を謳^{うた}いながら、存在が一個の「主体」という枠組みではとらえられないとした。人は、ひとりで存在するのではなく、つねに「共に」存在するということ、だから、存在は必然的に「共存在」であるということを強調して、共同性の問いを存在論にまで深めた。ハイデガーの共同存在論は、それを「民族」の共同体に引きつけたことによって行き詰まった。だが、その「共存在」の考え方を糸口として、その後の共同体論が展開されていく。「共存在」は、存在のうとなるあり方だ。存在することのうちに、共同性はすでに生起している。だから、共同体とは、作られるべき目的ではなく、また、何らかの実体として構築されるべきものでもなく、「作品」のように作られるべきものでもない。そうではなく、それは、作られる手前に、つねに、「共に在る」というかたちで、わたしたちの個的存在を基礎づけている。

ジャン＝リュック・ナンシーは、ハイデガーが示した「共同体への要請」を読み替え、存在を分かち合うことに人間の根源的な共同性を見出した。人は有限、つまり、死にゆく存在である。死は、きわめて個人的な出来事のように見えながら、「わたし」ひとりで完結するものではない。その死は、自分以外の誰かに受けとめられることによってしか成立しないからだ。だから、死という出来事は共同で成し遂げられる出来事であり、共同性の唯一の生起なのだ。死を契機として、わたしたちの共同性が露呈される。そして、この共同性の露呈とは、わたしたちが有限であることの露呈以外のなものでもない。共同性、言い換えれば「共に在ること」は、露呈を介して生起することになるのだ。そのようにして、共同性を問う思考のなかに「エクスポジション（露呈）」のテーマが引き出されたのである。

（菅香子『共同体のかたち イメージと人々の存在をめぐつて』より。ただし原文の一部を変更した）

問一 本文中の空欄 A D に入る最も適切な言葉を、つぎの各群の a～eの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|--------|---|-------|---|-----------|---|--------|---|-------|
| A | a | ただし | b | かといって | c | それに | d | ましてや | e | ともすれば |
| B | a | だが | b | だからこそ | c | それどころか | d | それでいて | e | それゆえ |
| C | a | さらに | b | とりわけ | c | ところで | d | また | e | ところが |
| D | a | そればかりか | b | 裏を返せば | c | そうであるとすれば | d | つまるところ | e | さもなくば |

問二 本文中の空欄 あ う に入る最も適切な語句を、つぎの各群の a～eの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|---|------|---|------|
| あ | a | 変則的 | b | 段階的 | c | 多面的 | d | 加速度的 | e | 不可逆的 |
| い | a | 接点 | b | 交差点 | c | 帰着点 | d | 結節点 | e | 共通点 |
| う | a | 前提条件 | b | 交換条件 | c | 付帯条件 | d | 十分条件 | e | 最低条件 |

問三 傍線部①の「《地の塩》(二〇一一)」という作品について、その説明として最も適切なものをつぎの a～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 《地の塩》は、写真の展示を目的とする作品であったが、今では、鉛や塩でできた板だけが観客の目にさらされている。
- b 《地の塩》は、かつて鉛板に貼り付けられてあった風景の写真を、観客が想像しながら鑑賞する作品である。
- c 《地の塩》は、鉛板が時と共に別の何かに変化したことを、観客が実際に触れて確認する作品である。
- d 《地の塩》は、時間をかけて少しずつ変化する鉛板を、観客が間近に眺めて鑑賞する作品である。
- e 《地の塩》は、風景を記録した写真さえも、時間の経過とともに消えてなくなるということを観客に伝えるための作品である。

問四 傍線部②の「この比較的新しい制度」について、その説明として最も適切なものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 作品は、特定の役割を持つものでなく、あらゆる人に向けて作られるべきだという認識。
- b 作品が、展覧会や美術館などで展示されて、一般の人々でも鑑賞できる状況。
- c 個人に所蔵されていた作品が、美術館などに所蔵されるようになったという事態。
- d 展示される作品ではなく、展示するという行為それ自体が重視されるようになった状態。
- e 展示されて人々の目に映ることではじめて、作品が成り立つという見方。

問五 芸術作品における「エキスポジション」と「表象」について、本文中に述べられている内容と合致するものを、つぎのa～fの中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 従来の芸術作品には、出来事や人物などを語り継ぎ、説明するという「表象」の役割が与えられており、特定のイメージを作り出していた。
- b 現代アートでは必ずしも何かを「表象」する必要はなく、どのように「展示」エキスポジション「するかが重視されている。
- c 従来の芸術作品では、それが何をイメージさせるのが重要であり、「展示」エキスポジション「とはその「表象」を露呈させるものであった。
- d イメージを作り出さなくなった芸術作品は、何ものかを「エキスポジション」露呈、呈示「するものとなる。
- e 「表象」と「エキスポジション」は相互補完的な関係にあり、何かを「表象」していた芸術作品は、それを「露呈」エキスポジション「する現代アートへと進化した。
- f 芸術作品が何かを「表象」している時、その作品は何か「展示」エキスポジション「されると同時に、何かを「エキスポジション」露呈、呈示「していると言える。

問六 傍線部③の「共同体をめぐる思考の展開」について、本文中に述べられている内容と合致するものを、つぎのa～fの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 芸術作品は見られることを前提として作られるため、作り手の考えは重要ではなく、見るものの共同性によって「政治的な」イメージが形成される。

b 芸術作品はそれを見る人々を、言葉はそれを話す人々を結びつけるが、いずれも共同体の営みを成立させるために必要不可欠なものである。

c 私たちの個的存在は、他者とイメージを共有することで基礎づけられるため、芸術作品は共同性と根源的なつながりを持っていると言える。

d 共同体を作る際には、人はひとりではなく、つねに他者と「共に」存在していることを念頭に置かなければならない。

e 死が共同で成し遂げられるということは、死ぬことで共同性が露呈するということであり、そのため共同性は露呈によって生起すると言える。

f 人の死は自分ひとりで完結するものではなく、誰かがその死を受け止めることで成立するため、有限性を共有してはじめて共同性が生起する。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

室生犀星は去年の夏、軽井沢でふと軽い熱を出し、床についた。病名は肺炎で、あった。ほんとうは肺炎の上に「老人性」という三字がついていたが、私は病氣の名にしろ、何にしろ、「老人」という呼称を、犀星にはつげたくない。

生命の終る瞬間まで、「老人」では、なかった。肺の内部に、いつからか出来、大きくなり、彼を苦しめ、彼の手からペンを奪い、いろいろなものに眼をあてる、楽しい日々を奪った塊りと闘い、その塊りと、最後の壮絶な対決をして、力つきて、彼の生命をその灰色の塊りに渡した、最後の瞬間まで、犀星は「老人」ではなかった。

彼の癌の塊りが、脳に転移をしたために来た軽い麻痺で、万年筆が彼の手から落ちた瞬間まで、犀星は、書いた。鋭い嘴をした秃鷹のような犀星は、その黒い翼を背中に重ねて休み、気分がいい時間がくると、その翼を大きく張り、生命のへどを吐く、彼の偉きな、輝いた、仕事をした。室生犀星が私に与えた最後の葉書に、こう書いてあった。

（風邪をひかぬように、暖くして、仕事をして下さい。僕もそのようにしてぼつ、ぼつ、仕事をしていますから、安心して下さい。）

この最後の手紙は私の胸を痛くした。

犀星の文章には、最後まで、若い張りがあったが、彼の顔つき、ようす、歩きかた、にも同じ、若い張りが、あった。老人と言われることを嫌い、七十と言われることを嫌ったが、私はしばしば彼の前で、「お爺さん」という言葉を出した。それは私に、犀星が老人だという意識が、全くなかったからだだった。

い

犀星は私たちが、「お爺さん」という言葉を出す度に、

いやな顔をし、時には抗議をした。

或日私は犀星の傍にいる時、誰かの話をして、（七十でしょう、あの方は）と、言った。

う

犀星は冗談らしく

「そう七十、七十と言いなさんな」

と言ったが、私は又失敗した、と、思った。この感想は皆が持っていたらしかった。或P Rの雑誌の女の子も私に、自分が

先生にお爺さんを感じないので、つい言わなくてもいい時に、お爺さんという言葉を出してしまつてはつとすると、言ったことがある。

去年の五月の半ば頃、軽井沢へ行く一寸前の或日、私は例の如く午後の三時頃から、犀星の家にゆき、夕飯までぼんやりと坐^{すわ}っていた。朝子さんが夕飯の指図をするために台所に行ったあと、私は犀星の傍に一人ぼつんと、坐^{すわ}っていた。幸福ではあるが、最も困る時間で、あつた。

犀星はふと立ち上つたが、立ち上りながら、言った。

「馬込の古い道をおみせしましょう」^②

私はふと、犀星が私を散歩に伴^つれて行つてくれるのかなと、思った。あり得ない幸運である。私は思い違いをして立上つてはおかしいと、思い、躊躇^{ためら}つたが、犀星はずんずん縁側に出て、後手^{うしろで}に兵児帯^{へこおび}を一寸廻すようにし、今にも庭に下りるようすである。私は立ち上つた。よっちゃんという女^{ひと}が、縁側の下に隠してあつたような、木の箱から、下駄を出して揃えた。犀星は黄色い、八丈のような裕^{あわ}に、いつもの青い羽織を着、ステッキを軽く打ちふるようにし、いかにも履きよさそうな、手ごろに減つた下駄を、からからと鳴らしながら、先に立って歩き始めた。私もあとについて歩き出したが、その時私の頭に、(三尺退^{すさ}つて師の影を踏まず)という、中国の昔の人が言つたらしい、古色蒼然^{そうぜん}とした言葉が、浮び上つた。現代としては奇妙な考えだが、私はその時、全くその言葉の捕虜^{とりこ}になつていた。明治生れの人間には時々、ふつと浮び上る、奇妙な礼儀のようなものがある。もつとも犀星の平常の態度、ようすの中に隠されていて、ふと顔を出す時のある、そういう礼儀のようなものが、犀星の傍にいる時、強い暗示を、私に与えている、というような、傾向も、あつた。

私は犀星のあとから、一二歩退^{さか}つて、恐縮した恰好^{かっ}で、歩いた。ハンドバッグを持っていない手持無沙汰で、私の手は前に軽く組まれていて、その私の恰好は、宮様のお付き女官の感じだった。犀星は、(どうしてあとから来るんだろう?)という様子で、不自由そうに、首を後^{うしろ}にふり向けふり向けて、ぼつり、ぼつりと話をした。

私は不思議な道を、歩いてゐた。日暮れ刻^{どき}前の、白い光の中の道だったが、その白い光は、私のまだ見たことのない世界を、

照らし出して、いた。馬込の細道の石ころは一つ一つが、不思議な、見たことのない石に変わり、私は白い、清らかな、明るさの中で、石ころを見、両側の家の垣根からもれる緑に、目を遣った。

その不思議さは、犀星に、馬込の道を案内して貰っているのだという、え、私一人だけのために、という、意識から来ていた。それは光栄の道で、あった。それには犀星の文章の秘密も、絡まっていた。特異な鋭さのある犀星の眼が、すぐ自分の傍にあつて、今もその眼が働いているのだ、と、意識することが、一種のあやかしのようなものを辺りに塗りつけ、石ころも、垣根も、緑の木も、忽ち不思議な世界のものとなって、白々としたものの中に浮び上るので、あった。「女ひと」の中に、詩の一字、一字を組み合せては解き、している犀星が、散歩の道で、道端の緑の樹々の枝の間に、その文字を並べては又、置きかえてみる、というところがあつたのを想い出した私は、言った。

「この辺には先生の文章の秘密が、沢山ころがつているのでございましょう?」

「いやあ」

犀星はうその否定をし、しばらく行くとステッキを高く上げて、木の名などを私に、説明したりする。

時々向うから車が走つて来る。子供を引っかけ、老人を跳ね飛ばして、その儘逃走する、恐ろしい車の幻影が、どの車をもつき纏っている、このごろの車である。犀星は車が来ると、ステッキを右手に持った両手を広げ、私の横側に蝙蝠のように体を横にして、車から私を庇うような形をするのである。私は犀星のすることにハラハラしたが、それと同時に、全く「老い」というものをうけつけない、もの凄く老人嫌いの犀星を、感じた。私は犀星のすることを止めてはいけなそうに危険な時には、犀星と素早く入れ替つて、犀星の危険を救おうと、気がまえて、歩くことにした。

犀星は「老人」でも、まして、「老作家」でも、なくて、若い一人の老書生で、あった。犀星は、「老人」を拒否すると同時に、文壇の長老をも、老大家をも、拒否していた。自家用の車を持たず、魚屋に魚を買いに、行った。その気魄が、彼を若い老書生に、見せた。貧しさの中にいた、昔の自分、有名のなかった時の自分を、犀星は頭から離さなかった。だがこのごろの、虚栄心と繋がっている、所謂道徳で、それを頭から離さずにいたのではない。それを頭から離さずにいることを、人々に見せて

いたのではない。彼は昔の貧乏と、地を匍はう蟲むしのような、有名のなかった自分とを、頭から離すことが、出来なかったのだ。

犀星は又、母の無い子供であったことの哀しみを、胸に抱きつづけて、来た、その寂寥りようの音を出す貝のような心を、犀星はいつも胸の底に、抱いていた。昔の貧しさと、有名なない、金もない時の、蟲むしのような自分と、母への悲慕とを、いつも中に持っていた犀星は、弟子にも、家に来る編輯者しゅうしやにも、思い遣りを、注ぎかけていた。蛇にも、金魚にも、注ぎかけていた。

【一】三月一日に、不幸な最後の入院をする十日ほど前、私は犀星の書齋しやうしやうにいた。夕飯じふめ刻に近く、電燈はもう点いていて、部屋は鈍い、黄色い光の中に、あった。明るい、電燈の光と、紅玉ルビイのような、紅い、反射式の電気ストオヴや、橙色だいだいに、うす青い炎が絡んで、何かの舌のように燃えている、ガストオヴの光とが照り合っていた、華やかな座敷、私も、小さな蟲むしのようにして、その光榮の光とともに浴びさせてもらい、嬉々ききとしていた、その犀星の、明るい座敷は、犀星の病名が、肺癆はいらうであったことを知ってからは、私の眼から消え、鈍い、黄色い光の中に、犀星は坐っていた。半信半疑の顔をどこかに隠して、元氣にふるまおうとして。その鈍い光の中での或日である。矩形くわくけいの、覗のぞき窓をつけた障子の向うに、オーヴァーを着たれい子さんの影が、映った。すぐに、手に提げたポリエチレンの袋に金魚が入っているのが見えて、彼女が犀星のために金魚を買って来たのだとわかった。

「赤か？　ぶちか？」

犀星が、言った。噁しゃがれた声だった

「赤のと、ぶちのです」

「そうか」

犀星はそのまま、坐っていた。立って行こうとはしなかった。少間しばらくして朝子さんが来て、私と話しはじめたが、二人はカタリという、犀星が何かにぶつかったような音を聴いて、同時に不安な顔を犀星に、向けた。

犀星は、いつこんなに痩せたのだろう。背中と肩が尖とがった、彼の特徴である広い背中だけになったような、腰から下に力のない形で、折れたように後向きに横坐りになり、覗き硝子から暗い廊下を覗いていた。音は障子際にあった何かに、向き直る

拍子に体がぶつかったのだ。犀星はその儘少間じつと、動かなかった。犀星は金魚が、見たかったのだ。(赤と、ぶちだと、言った。どんな奴だろう)犀星は、そう想った。犀星の心の中には、息苦しい透明な袋の中で、夜の道を提げてこられた、二匹の新入りの金魚が、馴れない、新しい家の水鉢の中で、どんなにしているか、元気で泳いでいるだろうか。そういう想いが、あったのだ。

お

直ぐに見たかったのだが、立上るのも、障子を開けるのも、倦かったのだ。【ii】

私は黒いセルの袷を着た、折れて、障子にぶつかったような、犀星の後姿の中に、死んだ母への悲慕と、貧しさの中で、小さな子供の時から成長した、人生の中で、「あはれ」というものが、庇の方から少しづつ、蜜のように溜まり、今では一杯に湛えられて来ている、犀星の心というものが、恐ろしいほどに、出ていた。

犀星は文学に飛びかかり、文学をしゃにむに、腕と手でねじ伏せ、足の下にひき据えたが、そうして、そこに、鋭い、禿鷹のようなしたたかさを、持っていたが、文章を書いていない時の犀星は母への悲慕と、女への思慕と、そこに溜められ、たくわえられて来た、蜜のような、「あはれ」を知る心で一杯になった、一人の哀しみの人間で、あったのだと、私はそう、思っている。

(森茉莉「老書生犀星の「あはれ」より。ただし原文の一部を変更した)

問一 本文中の空欄

あ

い

お

に入る最も適切な言葉を、つぎの各群の a ～ e の中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|-------|---|-------|---|-------|---|--------|---|--------|
| あ | a | なぜなら | b | そのため | c | したがって | d | それにより | e | それでもなお |
| い | a | そのうえ | b | だから | c | ゆえに | d | そのかわり | e | だが |
| う | a | さて | b | すると | c | しかるに | d | あるいはまた | e | さらに |
| え | a | 一方 | b | それにより | c | しかも | d | すなわち | e | それでいて |
| お | a | そのかわり | b | だが | c | すると | d | そうして | e | さて |

問二 傍線部①に「私は又失敗した、と、思った」とあるが、筆者がそのように思った理由として、最も適切なものをつぎの a

～ e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 七十と言われることを嫌った犀星の前で「お爺さん」という言葉をつい出してしまい、以前にも犀星を怒らせてしまったことが何度もあったから。
- b 犀星の姿は若々しかったにもかかわらず、しばしば七十の犀星を「お爺さん」と呼んでしまい、犀星にたしなめられたことが以前にもあったから。
- c 犀星が老人の話を嫌っていることを忘れて、老人の年齢について話題にしてしまい、犀星に抗議されたことが何度もあったから。
- d 犀星から老人を感じないので、犀星の前で P R の雑誌の女の子とお爺さんの話をして、老人嫌いの犀星に嫌な顔をされたことが以前にもあったから。
- e 犀星が老人と言われるのを嫌がっていることを知っているのに、犀星の前で老人の年齢について話題にしたことが以前にもあったから。

問三 傍線部②に「馬込の古い道をおみせしましょう」とあるが、この散歩の場面に対する説明として、最も適切なものをつぎの a ～ e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 明治生まれの犀星が礼儀に厳しいため、宮様のお付き女官のような格好で犀星の後ろを一二歩退って歩いていた。

b 犀星から散歩に誘われて一瞬躊躇ったが、嬉しさのあまりすぐに立ち上がり、散歩道を歩きながら犀星の文章の秘密の話をした。

c 犀星は車が走ってくると体を張って私を守ろうとしたので、犀星のすることを止めてはいけないと思い身を任せた。

d 散歩道には犀星が文章を作るときの秘密がたくさんあるようだったが、それを尋ねても犀星は認めようとしなかった。

e 死の近い犀星が私だけを散歩に誘ってくれたことが光栄で、散歩道の石も垣根も緑の木々も白く光って不思議な道に見えていた。

問四 本文中の【i】から【ii】までの内容として、最も適切なものをつぎの a ～ e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 犀星は自身が肺癌であると知ってから、部屋の光の色を鈍い黄色に変えた。

b 犀星は体調を崩して以降、その眼から光が消えて部屋も鈍い光に包まれた。

c 犀星は新入りの金魚の様子を気にかけていたが、立ち上がって見に行くことはしなかった。

d 犀星は若い頃から金魚に思い遣いを注いでいたので、れいこさんに金魚を買ってこさせた。

e 老いを受け入れられない犀星は、自分の病氣も受け入れようとせず気丈にふるまっていた。

問五 傍線部③に「私はそう、思っている」とあるが、筆者は犀星をどのような人間としてとらえているか、最も適切なものを
つぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 肺癌を患いながらも、「あはれ」と哀しみをたたえながら文学に真摯に向き合う人間。
- b じつと金魚を眺めているような「あはれ」を知る心と、子どもらしさをあわせもった人間。
- c 幼少時の自身の経験から「あはれ」を知る心もち、周囲に分け隔てなく思い遣りを注いでいた人間。
- d 有名になってからも「あはれ」であった頃の自分を頭から離さず、若々しくあり続けた人間。
- e 貧しさの記憶によって醸成された「あはれ」を心に抱き続けたことで、老人にはなりきれない人間。

〔三〕 つぎの文章は1984年に出版された『情報ネットワーク社会』の一部である。これを読んで、後の問いに答えよ。

最近の情報化にかんする議論をみると、いかにも技術論が先行し、ほんらい、技術を手段とし^(あ)ゲボクとして使う立場にあるべき人間が、むしろ追いまくられ、使われてしまっているようにみえる。経済の言葉でいえば、技術が押し込む「テクノロジ・プッシュ」の状態から、需要が引く張る「デマンド・プル」の方向に転換すべきだという議論が強まるのも当然である。あるいは、そんな経済の議論からは離れて、もっと人間が正面に立ち、人間中心の情報社会論を構想すべきだという正論があらためて主張される。筆者の議論も、そういった主張から批判をうけている。

人間中心の情報社会論——これはまさに正論であり、おそらく誰にも異論はないであろう。私も、それを求めて本書を書いているつもりである。しかし、歴史的に形成されてきた現時点の産業社会を出発点とし、それを初期条件としたとき、どのような経路を通ればそこにたどりつくことができるのであろうか。ただ転換を叫ぶだけでは無意味であるし、またどこかを変えれば、直線的に人間中心の情報化社会に進みうるほど問題は単純ではない。

市場を中心とした現在の経済システムにおいては、どんな財・サービスを作るかという点では供給者側がイニシアティブをとるという仕組みになっている。たしかに、供給者側も需要者がどんなものを欲しているかを調べ、それに応えるものを供給しようとするのは当然であるが、具体的な財・サービスのかたちにしてこんなものはどうですか、買っていますか、と最初に問いかけるのは供給者の側なのである。需要者のほうは、供給者の提供するそのメニューをみて、そのなかから自分の好むものを買うというかたちで反応する。したがって、いやなものを買わないという点で最終的な決定権は消費者が持っているが、イニシアティブをとるのは供給者のほうなのである。だから、供給先行を需要が引く張る方向に転換させようと思っても、この前後関係それ自体を逆転することはできない。できることは、需要者が買うことを拒否したことの意味がうまく供給者の側に伝わるような方法を考え、それを通じて供給者が需要者の意向により敏感に反応するような仕組みにもっていくことである。

いうまでもなく、市場を利用することを止めてしまつて別のシステムで人々の需要に 대응していこうのであれば、消費者、ないし人間中心の、彼らがイニシアティブを持つシステムを形式的には作ることができるかのように思われる。資本主義経済においても公共的な財・サービスは、人々のニーズに对应するというかたちで市場を通さず供給されている。しかし、現状における公的な教育や医療におけるそのサービスの内容をみれば、それは人間中心とは程遠いと言わざるをえない。

単純な比較はできないわけであるが、同じ教育や医療でも市場におけるサービスのほうが良い場合が多いので、その場合には人々は多少金銭的な無理をしても私的サービスのほうに移ってきている。これは、資本主義経済のなかでの公共部門だからそのようなことが起こるのかも知れない。しかし、社会主義的な仕組みに変えてみても、事態は変わらず、企業という供給者に代わつて官僚がイニシアティブをとるだけだということは、すでにこれまでの歴史的経験が証明している。私個人の経験でも、モスクワのデパートに立ったときの寒々とした感じは忘れることはできないし、また街にもそれを償う人間的な顔を見出すことはできなかった。

結局のところ、人々がどんな財・サービスを欲しがっているかを集約するには、市場機構という手段に頼る以外によい方法はないのである。さまざまな批判に耐えて、数々の危機を通過してきたこの手段に信頼をおき、それを前提として人間の顔を①した市場機構を求めてゆくべきなのである。もとよりこれは、これまで繰り返し議論されてきた論点であり、なにも新しい問題ではない。本書の文脈で問われるべきことは、情報化がそこにかかる影響を及ぼすか、プラスに作用するか、それともマイナスに働くかということである。その点をめぐつて、以下、本質的な論点を整理してみよう。

第一に、マイクロエレクトロニクスの技術は、小規模分散型の細分化された生産を可能にし、それが生産者と消費者との間のフィードバックをやりやすくする。最近の技術革新が小規模分散化の傾向を持つてきていることは、それによる製品の特徴である「 」などという言葉とともに言い古されてきているが、この消費者との対話をさらに可能にする

という面でより積極的な評価が与えられるべきであろう。小さく始められるということは、生産者と消費者との結びつきを作るうえで画期的な意義を持っている。かつての大規模生産の時代には、消費者の声がかかりに生産者に届いたにしても、生産

者は微調整することはできず、また大量販売は必然的に消費者の個々の好みを抹殺せざるをえなかった。小規模分散型の技術の下では、生産者は消費者に小さく問いかけ、そこから戻ってくる声にもとづいて微調整することができる。また、既存の生産者が需要者の要求をみたしていなかったり、高すぎる価格で超過利潤をえている場合には、新規の参入者が登場して欲求のくい違いを埋め、価格を引き下げる。情報系の技術革新は、そのような参入を容易にしているのである。

そのような人々のセンコウ^(い)の小さな差異、それに反応した微調整によって一体何が生まれてくるのだ、それは時代が方向を失っていることの反映にすぎないのではないかという疑問もあろう。たしかにその通りかも知れない。しかし、相互依存が深まり複雑さの程度が飛躍的に増大した現在の経済条件の下では、細部の連結のメカニズムがあたかも人体の神経系統のように微妙にできていなくては、大きな動きもチヨウヤク^(う)もできない。われわれの生活は些細な財・サービスの上に成り立っていること、また小さな革新の累積の上に大きな革新もあらわれることを軽視してはならない。まさに、「細部に神は宿る」^②のである。

第二に、生産者と消費者との間の連結の仕方は、基本的にはその間の情報のやりとりの具合によって規定されるが、ここでも「ニューメディア」^{注1}と総称される情報技術が新たな連結の様式を作り出す可能性を開いてきている。ニューメディアの特色は、マスコミ^{注2}からミニコミに至る多様な媒体を提供するというところにある。広告が消費活動に影響を与えることはいうまでもないが、われわれのライフスタイルは深いところでマスコミに左右されている。生産者と消費者を結ぶ媒体がマスコミだけであれば、画一化や一様化は避けがたいであろう。数百万人から数千万人を対象とする情報提供であるかぎり、情報提供の内容は子供から老人までを含んだ平均的な関心に焦点をおかざるをえないからである。数千人とか数万人を対象とする情報は、はじめから除外されてしまっている。

CATV^{注3}などのニューメディアは、地域に密着し、特定の視聴者を焦点として小さく仕事を始め、それらを相互に連結していくようにする。ここでも小さく始めることの意味は大きく、また違った発想のコミュニケーションの役割にも注目したい。少なくともここには、生産者と消費者との間で、あるいは趣味を同じくする同好者の間で、きめ細かなコミュニケーションが成立しうる可能性がある。

いうまでもなく、ニューメディアが操作可能なものであれば、これが誰かによって支配され、情報を制御する道具として使われる可能性はつねに存在している。その危険を軽くみてはならない。しかし、同時に大衆の健全な判断といったものを軽視することも適切ではない。少なくとも、いま述べている消費の文脈では、かつてイリヨク^(え)をふるった広告などによるブランド・イメージの影響力は次第に小さくなってきているのである。思いもかけぬ流行商品が生まれるとともに、意外に堅実で个性的な商品に人気があることをみても、消費者が生産者との新たな結びつきを求めていることは確かなように思われる。

第三に、仕事と趣味、仕事とボランティア活動などの境界が融合してきていることもプラスの方向に作用するであろう。これが情報化の直接の影響かどうかは不確かであるが、少なくとも情報化技術が趣味を仕事としたり、ボランティア活動をおつてよりやりやすくしていることは事実である。通信のネットワークが同じ志を持つ人々の連結を容易にするのであり、それが仕事につながる契機ともなるのである。ベンチャー・ビジネスのクラブがロータリー・クラブの組織論に基づいて発展していることなども、これと似た動きである。アメリカでは、ボランティアの新たな活動が「ネットワークキング」という用語で注目されだしている。これらは市場というパイプがつまったところで、広い意味での生産と消費とを結びつける新たな環と考えられる。

以上、さしあたり三つのプラスの面をあげたが、これらが良いことづくめかといえ、その裏側には過剰な情報の生産と供給、あるいは情報とモノの氾濫といったマイナスの事態がひかえていることを忘れてはならない。いま述べたような小さく問いかけることの利点は、逆にいえば多くの人が市場に参入できることを意味しており、つねに過剰な供給の傾向を持っている。それは、いまの日本における書物や雑誌の供給をみてみれば、一目リョウゼン^(お)であろう。

出版という産業は最も参入の容易な市場であり、売れる売れないは別にして、誰もが供給を試みることができる。だから、一年の出版書籍数はなんと一〇億冊、雑誌は三〇億冊ということになる。たしかに、情報の氾濫である。莫大^{ばく}な無駄かも知れない。しかし、これは情報化社会には不可避なコストとみるべきである。良い情報だけを選択して作るというようなことは不可能である。もともと良い悪いというような判断は主観的であり、一時的であつて、事前には誰も決められないのである。異

なるものの新たな結合、まったく無意味と思われるものの新たな意味づけ、忘れられていた情報の偶然の発掘、無駄な情報
 報の淘汰、それらの「偶然と必然の微妙な相互作用」^③によって、新しく価値あると思われる情報は作られてゆくのである。

(今井賢二『情報ネットワーク社会』岩波書店より。ただし原文の一部を変更した)

注1 ニューメディア 1980年代に注目された、新聞やテレビなどマスメディア以外の新たな情報媒体のこと。ファク

シミリ、CATV、衛星放送などがある。

注2 ミニコミ マスコミの対義語。フリーペーパーや冊子、コミュニティFMなどがある。

注3 CATV ケーブルテレビ

注4 ローター・クラブ 国際的な社会奉仕団体

問一 本文中の傍線部(あ)～(お)のカタカナ部分にふさわしい漢字を、つぎの各群のa～hの中からそれぞれ二つずつ選び、
 その記号を解答欄にマークせよ。

(あ)	ゲボク	a	僕	b	外	c	黙	d	撲	e	蹴	f	解	g	朴	h	下
(い)	センコウ	a	専	b	好	c	先	d	攻	e	詮	f	考	g	選	h	行
(う)	チョウヤク	a	役	b	超	c	躍	d	重	e	丁	f	釈	g	跳	h	訳
(え)	イリヨク	a	偉	b	以	c	力	d	慮	e	畏	f	怖	g	意	h	録
(お)	リヨウゼン	a	令	b	繕	c	領	d	全	e	然	f	瞭	g	涼	h	漸

問二 本文中の空欄

記号を解答欄にマークせよ。

に入る言葉として、最も適切な語句を、つぎの a～eの中から一つ選び、その

- a 針小棒大 b 粗製濫造 c 輕薄短小 d 門外不出 e 分合集散

問三 傍線部①の「人間の顔をした市場機構」について、その説明として最も適切なものをつぎの a～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a いやなものを買わないという消費者の意向を示すことで、供給者が持つイニシアティブを転換する仕組み。
b 消費者がどのようなものを欲しているかを調べて、供給者側が財・サービスをつくるというシステム。
c 財・サービスをかたちにするイニシアティブは供給者側が持ちながら、消費者のニーズが伝わる仕組み。
d 自分の好むものを買うことであらわれる消費者ニーズを、財・サービスを供給することで集約するシステム。
e こんなものはどうですかと、需要者側が供給者側に問いかける「デマンド・プル」に転換した経済。

問四 傍線部②に「細部に神は宿る」とあるが、これにあてはまるものとして最も適切なものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 相互依存と複雑さが飛躍的に増大している経済を成り立たせているのは、価格引き下げや新規参入といった小さな問
いかけである。
- b 連結メカニズムが人体の神経系統のような微妙な市場機構においては、消費者ニーズに敏感に反応する生産者の意識
が重要である。
- c 消費者のニーズに生産者が応えることができるつながりを生むには、小規模分散型の技術により小さく問いかける必
要がある。
- d 消費者の欲している財やサービスを生み出すためには、マイクロエレクトロニクス技術に基づく生産方式が必要不可
欠である。
- e 消費者の好みが反映されるという経済システムの大きな革新は、小規模生産という生産者側の小さな革新によって支
えられている。

問五 傍線部③の「偶然と必然の微妙な相互作用」が成立するために必要な条件として、最も適切なものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a ニュースメディアのような情報化の影響が拡大し、ボランティアや趣味のような同じ志を持つ人々がつながった状態。
- b ミニコミのような新たなパイプにより、消費者がマスコミの影響に左右されずに情報の良し悪しを選択できる状態。
- c マスコミからミニコミに変わることによって過剰な情報が供給される中で、大衆が健全な判断をできるよう制御された状態。
- d ニュースメディアが新たに消費者と生産者を結びつけるとともに、無駄かもしれない情報も制御されずに溢れている状態。

- e 無駄かもしれない過剰な情報が供給されるとともに、生産者と消費者が同好者としてコミュニケーションを行う状態。

問六 筆者が考える「人間中心の情報化」とは何か、最も適切なものをつぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 技術革新による情報化で、消費者の欲求が発信され、生産者と消費者が新たな形でつながる経済システム。
- b 技術論が先行する情報化ではなく、人間のイニシアティブにより消費者の意向を技術に反映させていく仕組み。
- c 技術革新により情報が溢れることで多様な消費者の欲求が伝わり、新たな財やサービスが生まれる市場機構。
- d 情報化により個々の好みを反映したメディアが登場することで、生産者が消費者の欲求を把握できる仕組み。
- e 膨大な情報が供給される中、市場に競争が発生することで、生産者よりも消費者が主導権を持つシステム。